富山発夢未来　～日々新たな気持ちで挑み、学びを楽しむ～

未来志創

2023(令和5)年
11/07 火
通心037(第770号)

「私」という奇跡の存在とかたじけなさ

思いを文字にすることは勇気がいる。自分の思いが相手に伝わるかどうかなんて誰も分からない。ましてや多様な価値観をもって生まれる人間だからこそ、ある人には伝わっても、ある人には伝わらない。そんな中、毎週読むこの“すごい”社説は、ピンポイントで心に響く。これだけの文章を書けるようになるのに、どれだけの命の時間を使っているのだろうか。人間だけがもつといわれる言葉だからこそ、誰かに届けることを諦めたくないと思う。

あなたがこの地球上に生まれてくる前の話である。

仮にまだ天上界にいるとしよう。おびただしい数の生命エネルギーが、この大宇宙の中で生命体として生きていけるたった一つの星、地球に生まれることを希求して、今か今かと順番を待っている。

そしていよいよ地球に誕生することが許された。しかし、どんな生命体として生まれるのかは分からない。なにせ地球には「動物」という括りの生命体が、確認されているだけで 175 万種もあるからだ。

たとえば、魚類は3万 1000 種、鳥類は 9000 種、爬（は）虫類は 8700 種、両生類は 6500 種、哺乳類は 6000 種。

これらはすべて脊椎動物で、サンゴやクラゲなどの刺胞動物が1万種、ハリガネムシなどの線形動物は2万 5000 種、タコやイカ、ナメクジなどの軟体動物は8万 5000 種、そして昆虫などの節足動物は 110 万種。

さあ、生命エネルギーが一つひとつ、くじのようなものを引く。ほとんどが数の多い昆虫や魚類、軟体動物の種を引き当てて地上に生まれてくる。あなたの一つ前のやつはナメクジになり、一つ後ろのやつはハエになった。

700 種ほどしかないイヌや、100 種にも満たないネコを引き当てるのは奇跡に近い。さらにその中で、何もしなくてもエサがもらえるペットという地位に就くことができるのは奇跡中の奇跡だ。ましてや1種しかない人間に生まれてくるなんて……。

先月、自殺予防月間のイベントで、「大海原の海中深くに棲んでいる年老いたウミガメ」の話を聞いた。お釈迦様が阿難（あなん）という弟子に語った話だそうだ。

そのウミガメは 100 年に一度、海面に顔を出す。果てしなく広い海に1本の流木が漂っていて、その真ん中に穴が開いている。

お釈迦様は言う。「阿難よ、100 年に一度浮かび上がるこの亀が、海面に顔を出そうとした瞬間、その流木がそこにあって、その穴に首を突っ込み、その穴から顔を出すことがあると思うか？」と。

「いやいや、お釈迦様。そんな偶然はあり得ません」と答えると、お釈迦様は「絶対にないと言い切れるか？」と念を押された。

「何億年かける何億年の間には、もしかしたらあるかもしれませんが、無いと言ってもいいでしょう」と阿難が答えると、お釈迦様はこう言ったのである。

「阿難よ。我々が人間として生まれることは、この亀が流木の穴から顔を出すことより難しいんだ。有ることが難しいことなんだ」

この話が「滅多に起きないこと」＝「有り難い」の由来なのだそうだ。

話を戻すと、175 万種の中にたった1種しかない「人間」というくじを引き当てるのはまさに天文学的な確率なのである。それをあなたは引き当てたのだ。

しかし、である。「人間」というくじを引き当てたとしても、たまたま生まれた場所がアフリカの紛争地域や極東アジアの軍事独裁国家だったという人も少なくない。

物が豊かで、平和で、法律の範囲内なら何をしてもいい自由が約束されている「時代」と「地域」に生まれたあなたは、それだけで希少価値の存在だと言えるだろう。

『修身教授録』（致知出版社）という本の中でも、そのことを著者の森信三氏がこれでもか、これでもかと訴えている。

「我々は、人間として生まれるのが当然だと言い得るような、特別な権利や資格を持っているわけでもなく、人間として生まれるに値する努力をした結果、人間としての生を受け得たわけでもない」

「しかし、人間として生を受けたことに、かたじけなさを感ずることがないまま今日まで生きていたのではないか。それは人生の根本問題に想い至らぬという愚かさにもなるのだ」と。

そのことを信三氏は「親が食券を買ってくれたのに、それが何なのか教えてくれなかったようなもの。知らないから捨ててしまう人もいる」と例えている。

『修身教授録』は、昭和 12 年から 14 年にかけて、教師を目指す師範学校の学生に向けて語られた信三氏の講義録である。

「人間として生まれてきた奇跡とかたじけなさ」、これを 10代のうちにいろんな先生たちから何度も何度も語られていたら、命を粗末にしないどころか、命の使い道を考える若者になる、と思うのだが。！

「日本講演新聞 社説 2997 号（2023/10/16）」より